
赤いふち

小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤いふち

【Nコード】

N4817S

【作者名】

小豆

【あらすじ】

短い話です。思いついたから書いてみただけです。暇は潰せなさそうですね

その瞬間、世界が変わったように思った。

自分は一瞬にして異世界に迷い込んだかのように思えた。

脱ぎっぱなしのパジャマ、季節外れの使い捨てカイロ、ペンが飛び出している筆箱、
床に無残に置かれたそれらが、いや、ゴミ箱の中に入れられたそれさえもが
色とりどりの色彩を放ち、机の上に無造作に置かれたゲーム機からも花の香りが漂って来るように思えた。

周りを見渡すと自分を囲んでいるそれらの物のまぶしさで目が眩むようだった。

それらはとても高貴なものに見え、手を触れるのもためらわれた。

目を瞑っていてはわからないその美しさ、
もしかしたら自分は今まで目を開いてはいなかったのではないかとばかばかしい考えが頭に浮かんだ。

ああ、自分の生きてきた世界はこんなにも美しかったのか。

足を一步、踏み出してみる。

すこし視界の端っこが、歪んだように感じた。

「少し度が強いですかねえ？」

「どんな感じ？」

母が訊いてきた。

「いえ、どうせ授業中とかにしか使わないのでこれでいいです」

と、椅子に座ったままの中年の男性にこたえる。

「それではこれで作っちゃいますんで受付の前で待っていてください」

中年の男性はそう言うところからメガネを受け取り店の奥へと消えていった。

「壊さないでよ、いい値段するんだから」

受付に向かいながら母が私に言った。

「分かってるー」

私は適当に返事をする。

母は顔をしかめてしつこく注意する。

あーもう、うるさいなあ

「いい？壊したら自分で買わせるからね、メガネ！」

(後書き)

目がいい人は多分わからないと思います。

私は目が結構悪いほうなので、一日メガネをつけていないと次に付けた時、びっくりしてなんだか嬉しくなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4817s/>

赤いふち

2011年10月6日03時34分発行